

## 学生時代にワープした

徳永 桂子（教育・昭和57年卒）

教育現場を離れた年が、まさにコロナ発生の時でした。人との接触が制限され、会話をするのは家族や親戚など、ごく限られた間柄の人達だけ。家に籠もる生活を余儀なくされる狭いコミュニティで3年も過ごしていると、人との関わり大切さや人とのつながりの有り難さを感じずには、いられませんでした。

世の中も少しずつ日常を取り戻してきた頃、久しぶりに大学研究室の学年同窓会をしようという話が持ち上がりました。これまで数人で集まることはあっても、全員規模の同窓会は、いつからか記憶にないくらい昔のことです。そこで、近くに住む連絡が取れる4人で、勝手に幹事をすることにしました。

社研で私達の学年は、全部で21人。学年の愛称は「くじら組」。何故その愛称になったのかは、今となってははっきり思い出せないのですが、ずーっと私達の間で同学年を指す愛称として定着してきました。

そのくじら組全員への連絡手段の検討からスタート。住所が分かる人、電話番号を知っている人、LINEやメールが繋がっている人、4人居れば結構誰かにつながっているものです。日程を決め、場所を決め、3ヶ月前には連絡がつく人から順次同窓会のお知らせをしていきました。

当日は、県外から5人、県内9人、計14人の参加を得ました。3分の2の出席はなかなかのものです。JRで来る人が多かったので、高松駅前の花時計で待ち合わせました。私たちが学生だった頃とは、高松駅も駅前も花時計も大きく変わっていましたが、待ち合わせる同級生の顔は昔のままに思えました。

「わあ、久しぶり〜。」

会うとみんなすぐ分かりました。

「変わらないねえ。」

・・・そんなはずないでしょ、と突っ込みを入れられそうな周囲の声は全く気にせず、私たちは、すぐ四十数年前の学生時代にワープし、気分は二十歳代に戻りました。県内で教員になっていた人達とは、時々会っていましたが、地元に戻った人、県外に嫁いだ人達とは、本当に久しぶりの再会で、中には学生時代以来という人もいました。それでも、一瞬にして年月のギャップを埋められるのが同級生のすごいところ、素晴らしいところです。美味しい料理に舌鼓を打ちながら、懐かしい話に花が咲き、近況報告に盛り上がり、あっという間に時間が過ぎていきました。楽しい時間というのは、本当に早く過ぎていくものです。また来年の再会を約束して、会はお開きとなりました。

元気をもらえたとともに、せっかく数十年ぶりにつながった絆をこれからも大切に、親交を深めていきたいと思った、くじら組同窓会でした。